

社会的事象と向き合い、多面的に見つめる ことのできる歴史学習と史料活用の意義

— 江戸図屏風を絵画史料として用いた授業からの考察 —

安城市立安祥中学校 松永 博司

1. 実施学年：中学校第1学年 教科・領域：社会科・歴史的分野

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

① 主題名

「江戸図屏風から見える江戸時代の暮らし」

② ねらい

国立歴史民俗博物館所蔵の江戸図屏風は六曲一双からなり、江戸とその周辺が描かれた貴重な屏風である。江戸時代初期につくられたものと想定され、日本橋界限には町人の生き生きとした姿があり、物資が港に荷揚げされる活気ある江戸の風景が描かれている。また、江戸城周辺には様々な役割を持つ武士の姿や、徳川家光由来の行事である鷹狩り・朝鮮通信使の江戸城登城なども描かれており、江戸時代の諸行事を視覚的に理解するためにも有効である。本実践では実物の屏風とともに、教材として開発した10cm程度のピース状にした屏風パズルや、原寸の1.3倍程度の拡大カラー図などを活用して、生徒が屏風を通して江戸時代の生活の様子について詳細に分析・解釈する授業展開ができるようにし、ねらいを以下のようにした。

- ・江戸時代初期に描かれた江戸図屏風を用いて、江戸の町の様子や描かれた人物の活動から、当時の幕藩体制や身分制度の確立の状況について触れ、江戸幕府の政治の特色を考えさせるとともに、幕府と藩による支配が確立したことを理解させる。
- ・江戸図屏風に描かれた町人の生活に注目させることで、当時の町人文化が都市を中心に形成されたことを理解させ、どのような生活をしていたかを明らかにさせる。

絵画に描かれている江戸時代を生きる人々の詳細な理解から、身分制度があったといわれる江戸時代において、実際に人々がどのような生活をしていたのか、登場人物を分析し、理解していくことにある。授業では江戸図屏風に対してこだわりを持って臨めるように、屏風の一部に注目させ、個々の関心を大切にしたい追究活動から進めることにした。その上で情報を集約し、大都市江戸の暮らしに視点を移し、様々な人々が役割を持って機能する江戸全体の様子が見えるようにしたいと考えた。

③ 博物館との関連

本校は愛知県の中央、安城市の東部に位置する学校で、国立歴史民俗博物館へは、校外学習や修学旅行などでも訪問する機会はなく、今回の報告の中では非常に関係が薄い学校であると言えるだろう。しかし、こうした学校が国立歴史民俗博物館と密接な関係を持って授業を展開するためにはどうすればよいか、このことを考えて取り組みを進めた。本実践では、学区内にある安城市歴史博物館において特別展示された国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」を用いた、遠隔地における博物館の史料活用を進めるとともに、パズル状にされた屏風を教材として活用することを目的に実践を行った。

従って、本実践にかかわる博物館との関連は、遠隔地において博物館所蔵史料を活用したことと、博物館において開発された教材を用いた実践として、指導・助言をいただきながら授業を進めた点にある。

3. 指導計画

本実践は、国立歴史民俗博物館博学連携研究員として、史料教材化の試験的な取り組みの一環で行われるとともに、愛知教育大学附属岡崎中学校における教育研究「次代を創る」研究協力者として、研究第3年次における歴史的分野の取り組みとして進めてきた。2009年1月の安城市歴史博物館特別展「江戸っ子が見た三河万歳」展に江戸図屏風が展示される機会を得て、安城市歴史博物館並びに文化財課の助言・協力を得て取り組んだ中学生を対象とした授業「江戸図屏風から見える江戸時代の暮らし」を通して、史料活用を用いた歴史学習の意義と課題について触れ、その可能性について考えていく。

| 過程 | 時間 | ○学習活動 ●学習内容 | 指導上の留意点 |
|-------------------|----|---|---|
| 「つかむ」 | 1 | ○江戸時代ってどんな時代？ ●既習の知識から江戸時代の全体像を想起した上で、江戸幕府成立当時の政治の状況や身分制度、それぞれの生活の様子等の内容を学習によって理解する。 | 小学校での学習成果などの既習の知識を大切に自由想起をさせるようにし、江戸時代について学んだことの内容を話し合いの中で再確認ができるようにする。 |
| 「みつめる」 事実と向き合う | 1 | ○一枚のかけらから探る江戸時代 ●江戸時代初期の様子が描かれた江戸図屏風の一部を渡し、模写や気付きの筆記などを通して、当時の生活を細部にわたって注目し、調査をする。 | 江戸図屏風をパズル化したものを用いて、細部にわたる調査を進めるようにする。 |
| | 1 | ○みんなのピースをつなげてみれば ●ここに注目していたピースをつなげ、江戸時代におけるそれぞれの身分の生活の全体像を屏風全体とともにつかみ、江戸時代の武士による支配とその役割、町人の生活とのつながりについて学ぶ。 | パズルの組み合わせと実物による全体調査を通して、関心を持った細部が全体でどのような場面なのか、追究したいという思いを持続しながら絵画の調査を続けることができるようにする。 |

| | | | |
|-----------------------|---|--|---|
| 「とらえる」 問題と 向き合う | 1 | ○江戸時代のヒーロー～この人に注目！～ ●再び江戸図屏風パズルを用い、描かれた人物で注目したい人物を模写し、今の自分たちの服装や生活などと比較しながら、どのような人物なのか考える。 | パズルに書かれたもののうち、特に人物に着目して細部にわたる調査を行うことにより、江戸時代に様々な人物が生活をしていることに気づかせるようにする。 |
| 「かかわる」 他者と 向き合う | 1 | ○江戸時代のヒーロー大集合 ●ここで調査した人物が屏風のどこにいるのか、拡大コピーに示すとともに、屏風に描かれた人物を取り巻く江戸の町でのくらしを眺め、様々な文化が集まっていることを安城市ゆかりの芸能「万歳」を通して探ることで、江戸時代の町人文化とその成立について理解する。 | 実物と拡大コピーの併用による人々の服装と生活の調査を進めることにより、当時の人がどのような社会の中で何をして暮らしていたのかをイメージすることができ、人物の姿とともに当時の暮らしについて着目することができるようにする。 |
| 「つなげる」 自分と 向き合う | 1 | ○江戸時代再発見 ●江戸幕府がどのような仕組みであったかを再確認し、屏風の絵で確認した風景や人物がどのような立場や役割を担っていたのか考えるとともに、当時の江戸時代の様子や文化について理解する。 | 常に史料をそばに置いておき、既習の知識と実際に調査した事実との確認を行い、江戸時代の人々の生活が実際はどうであったか整理することができるようにする。 |

本実践を通して、江戸幕府の政治の特色である幕府と藩による支配が確立したことを理解させるとともに、町人文化が都市を中心に形成された様子をつかむために、指導計画を立てた。小学校段階で江戸幕府の成立と参勤交代、鎖国について学び、身分制度確立と武家政治の安定、町人文化の繁栄について理解しているので、既習の知識を再確認した上で、当時の実際の生活を考える手段として、江戸の町の様子や人物の活動を江戸図屏風から読み取る「事実と向き合う」活動を行う。次に、江戸時代の様子を屏風から分析し、身分制度のもとに混在する武士と町人個々の様子に注目してその生活の様子を探る「問題と向き合う」活動を進め、多様な町人の姿からわかる当時の生活文化について考える「他者と向き合う」活動に発展させる。さらに、実際の江戸時代がどのような姿であったのか再確認し、最後に江戸時代について「自分と向き合う」活動を通しておさえるべき内容を理解したいと考えた。

4. 実践の概要

① 歴史の授業についての基本的な考え方

歴史学研究の進歩はめざましく、事実は常に更新されており、続々と明らかになるもののなかには既習の内容を否定し、教科書の記述を変えるものもある。例えば教科書に紀元前4世紀開始と記載されている弥生時代は、放射性炭素14の年代研究において、開始時期が通説よりも500年早いと発表された①。現在も議論されているが、青銅器編年の見直しなどの検証も進み、研究者の多くは新しい考え方に肯定的であ

る。一部の教科書では見直しも始まっているようで、教科書に記載される歴史事象は必ずしも正しいものではなく、常に歴史学の成果に従って更新されていることを、指導する私たちは常に意識しなければならない。

研究の更新により過去に暗記した歴史事象の書き換えが余儀なくされる事態は、用語の暗記が無意味であることを象徴しているといえる。しかし歴史学習を進める際、授業者は教科書の記載事項をおさえることに主眼を置きがちとなるのも事実である。ゆとり教育の批判、基礎・基本の徹底という言葉が声高に叫ばれる現在、ともすると答えを1つに求めることが容易な教科書の記載事項こそが基礎・基本であると考えて、テストや入試で安易に用語を問う姿があることは否めない。いかに覚えさせるかに終始してしまう風潮があり、結果として社会科が「暗記教科」としてのイメージを未だに払拭できずにいる。歴史学習が社会科の一翼を担い、「公民的資質の基礎を養う」という目標から考えれば、歴史学習は歴史学の成果を伝達することが役割ではないし、用語の暗記のみで思考力は養えない。歴史学習は、唯一他教科にはない「過去」を見るスケールを持っており、過去の断片的な事実をもとに多面的に事象をとらえて解釈・検討を重ね、当時の状況に対する自分自身の考え方を根拠を持って述べる力を育成することこそ、歴史学習で求められている力であると考えられる。

以上の意見のもと、筆者は過去を振り返るための史料活用にその有効性を求め、活用の過程で分析・解釈などの活動を展開することにより、児童生徒の思考力・読解力の向上につなげることができると考えた結論が、本実践への取り組みきっかけである。

② 指導要領で求められている能力の育成と史料活用

平成20年度に改訂された学習指導要領では、生きる力の育成を継承しつつ、具体的な手立てを確立する観点としての、思考力・判断力・表現力等の育成と、その結果得られる基礎的・基本的な知識・技能の習得をめざしている。このような姿勢は、平成20年1月に中央教育審議会答申で示された「習得・活用・探究」という考え方にも表れている。

歴史的分野に着目すると、具体的にどのようなことを学習で進めるべきか見えてくる。指導要領には、学習内容の確かな理解と定着を図ることはもちろんだが、「歴史的事象の意味・意義や特色、事象間の関連を説明したり、課題を設けて追究したり、意見交換したりするなどの学習の重視」によって「思考力、判断力、表現力等を養う」ことが示されており、資料を選択し活用する学習活動を進めることなどが求められている。またその際の具体的な手立てとして、「博物館や人的資源の活用」による地域の特性を生かした題材を取り扱う工夫や、時代や生活、そこに根ざした伝統や文化に着目した学習を挙げ、事象によっては十分な時間をかけて学習方法を工夫し、理解させることを求めている。

歴史学習では、個々の事象のみが取り上げられ、関連性を感じられずに言葉として暗記したり、無批判な理解に陥る傾向にある。こうしたなか、歴史を学ぶ意義を見だし、次代を創る者として、過去をどう学び、何を求めるべきなのかを明確にしなければ

ばならない。

③ 本実践における史料活用の方法

本実践では、史料を効果的に使い、「史料と向き合う」ことを通して江戸時代の実像に迫ろうと考えた。始めは1つの視点にこだわり詳細な調査をするミクロ的な視点から、全体を把握するマクロ的な視点に移行していくことで、史料に示された全体の風景とそこに生きる人々に触れることができるよう、三段階による史料活用を進めた。第1段階では10cm程度の江戸図屏風パズルのピースを用い、一人1ピースずつ持たせて観察力を高めることができるようにし、第2段階ではパズルを組み合わせて10名程度のグループをつくり、自分自身がこだわりを持った場面が江戸のどのような風景かを考えられるようにした。第3段階では、本物の江戸図屏風と実際の屏風より大きめに作成したカラーコピーを用い、近づいてその様子を眺め、屏風全体に描かれている江戸の町並みについて触れることができるようにした。絵画史料を見る時の視点として、人物や建物、生活の様子など、細部にわたる部分に目が行くようになるとともに、しだいに範囲を広げることにより、全体をも把握できるようになることを期待した。

④ 授業の経過

ア 1時間目「江戸時代ってどんな時代？」～既習の知識から時代の様子をつかむ～

導入段階では、江戸時代についての既習の知識を整理することを目的に、自由想起で江戸時代といったら思いつくものやイメージ、学んだことなどについて発表させた。ちょんまげや刀、武士といった表現や徳川家康の存在を挙げる者、士農工商などの身分について挙げる者もいたが、なかには織田信長の名を出す者もあり、江戸時代の学習内容が十分定着されているか疑問を感じた。史料を教材に用いる際、一定の知識があることを前提にしていかなければ、事実の検証をすることはできない。そこで、江戸時代の学習のオリエンテーションとして小学校段階で学習した内容を整理するとともに、中学校の段階で教える家光の時代に整備された武家諸法度の存在や武士との身分差、農民や町人との生活の違いを既習の知識をもとに学び、江戸時代の学習をする上でおさえておくべき基本事項をおさえた。

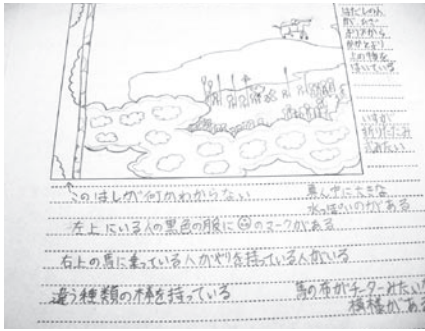
イ 2時間目「一枚のかけらから探る江戸時代」

前時までに学習した知識や内容をもとに、史料という「事実」に向き合い、既習の知識と重ね合わせながら史料批判・分析を重ねることを大切にして江戸時代を見つ



屏風の絵を模写する様子

め、当時の様子を検証するという活動をまず行った。生徒一人一人に屏風パネルの1ピースを配布し、この絵が「江戸時代の屏風」の一部分であることを知らせた。この絵にどのような風景が描かれているのかを把握させるために、詳細に絵を模写させ、その上で気付いたことや疑問を挙げさせた。生徒はそれぞれが受け取ったピースから、登場する人物の服装や持ち物・行動などに関心を



模写して気づき・疑問を挙げたワークシート

持った意見を挙げたほか、描かれている家紋の意味や街角に建っているものの役割などに疑問を持った。

- ・裸足の人が、ひざから下、かかとより上のものをはいている。
- ・いすが折りたたみ式みたい。
- ・違う種類の棒を持っている。
- ・馬の布がチーターみたいな模様がある。
- ・端が何かわからない。
- ・左上にいる人の黒色の服に、○のマークがある。

上記のような発見や疑問にあるように、描かれている風景の細部を狭い部分で見直すことで、江戸時代の風景を細かく観察し、絵が示すものが何であるのか、強い関心を持って多角度から史料を調べる活動を展開できた。

ウ 第3時間目「みんなのピースをつなげてみれば」

詳細な調査活動によって当時の様子をつかんだ生徒達は、しだいに自分の絵が江戸時代のどのような場面の中で描かれているものか明らかにしたくなってきた。そこで、さらに理解が進むように、それぞれのピースをつなげた。生徒の持っているもの



屏風のパズルを完成させ、話し合う様子



実物の江戸図屏風を眺める様子

町人、職人の町の暮らし

- ・江戸時代でもししまいがある。
- ・店は今と違う。どんな店かわからない。
- ・江戸時代の働く人の服装と武士の服装には違いがある。
- ・船がいろいろなものを運んでいる。

戦い

- ・争っているけど戦いじゃないと思う。
- ・人間が鳥を使って儀式？みたいなことをしている。なぜ？
- ・鳥を追いかけてとろうとしている。
- ・みんなで何かに注目している。

城と家(城下町)

- ・白い服を着ている人と赤い服を着ている人は何をする人？
- ・江戸城に外国の人がいるけど、何で外国の人が来たのか。
- ・男の人の服装にいろいろな種類がある。

- ・この授業のおかげでいろいろな発見があった。まさかこの時代に外国人がいると思わなかった。
- ・江戸時代にはたくさんの方がいて、武士が普通に歩いていたりしてびっくりした。
- ・パズルと屏風を見比べて絵を発見したり、絵の内容を考えてよかった。
- ・屏風を細かく見ると、疑問がいっぱい出てきた。いろいろな人物がいるから楽しく見られた。

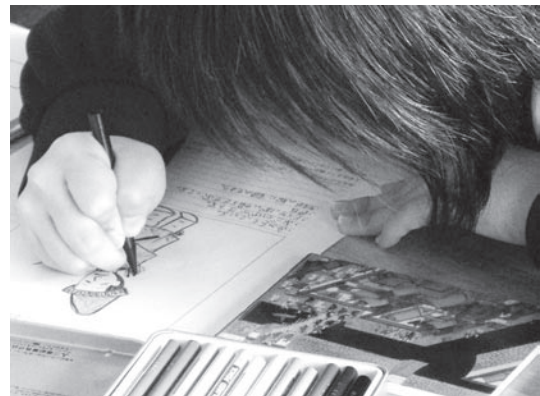
は主に、「日本橋界限（町や町人の様子）」「江戸城本丸付近（武士の仕事とくらし）」「桧物屋御鞭打（武士の行事・活動）」の三場面に分かれている。生徒はそれぞれのピースを持ち寄って互いに絵を合わせ、仲間を探した。しだいに繋がっていく絵を見て、「私のより人が多いなあ。」「自分のにも似たような橋がある。」「港にある荷物が僕のと違う。」などと、気付きをつぶやく生徒も多くなった。そこで、自分の持っていた絵が「どんな場面なのか」集まった生徒で話し合い、出された意見をもとに発表した。

それぞれの絵が同じ屏風の絵でも特徴が大きく違い、読み取れることも違うことに気付いた生徒は、互いの気付きをもとにして自分の担当以外の絵を見合い、全体がわかる実物（特別展に展示されているもの）を眺めることで、江戸という町全体の姿と、そこにいる一人一人が様々な仕事や役割を持ち、大都市江戸として賑やかな風景を創り出していることを理解した。上に挙げたのは、生徒の授業後の感想である。

生徒は、江戸時代が描かれた絵画史料という「事実」に向き合い、自分がイメージしている江戸時代の姿との大きな違いを感じたようだ。一部分を注視して見ても、全体を眺めてみても、今まで考えていた江戸時代というとらえ方ではいけないのではないかという考えを持ち始めるようになった。生徒はこうしたことをもとに、江戸時代の実像を自ら探ろうとする積極的な姿が見受けられるようになった。

エ 第4時間目「江戸時代のヒーロー～この人に注目！～」

江戸の風景に注目をした生徒は、友達のピースと見比べる際に、自分のところだけに描かれた注目すべき人物を自慢し合うなど、様々な人が描かれていることに関心を持ち、自分のイメージしている江戸時代との違いに気付いた。そこで、今度は絵画史料に隠された事実をもとにして、江戸時代がどんな時代であったのか、絵画から具体的に探ることを大切にし、「問題に向き合う」活動を進めることとした。



作業の様子

ここでは、特に絵図で自分の気になった人物に注目させることでそれぞれの身分の人々の仕事や役割についてさらに理解を深め、本当に自分が学んだような身分制度があったのか、自分の関心のある人物をピックアップして丁寧に描くことにした。この絵図のなかには、武士と思われる人物にも、袴をはいた者や裸足の者、脇差しを指した者、馬に乗った者などいた。

また、町人といっても、神楽を踊っている者や天秤棒を担いでいる者、荷物の積み出しをしている者のほか、物乞いをしていると思われる者など、実に様々な姿

<生徒から出された人物からの気付き>

- 旗を持っていてちょびひげ。和服じゃない。旗の文字は日本語じゃないから、外国人？ 服の袖が長くて茶色っぽい帽子をかぶっている。オットセイっぽい。
- 赤い帽子をかぶっていて、刀みたいなものを持っている。旗を持っている。
- 上が着物系で下がズボン系。馬には足をかけるところがあり、ひもがある。

が描かれており、それぞれの身分も違っていた。生徒は江戸の町にいる一人一人をルーペで眺め、特に注目した思い思いの人物を選んで描き、「何をしている人か」「どの身分か」といったことを絵と文で記述するようにしました。ルーペを活用して細部を眺めることで、生徒は江戸図屏風に描かれた人物の詳細まで調べ、どんなことをやっていたのか予想を立てることができた。



オ 第5時間目「江戸時代のヒーロー大集合」

江戸時代について明らかにするために人物を描いた生徒は、今度は「他者と向き合う」視点から、ここから友達の調べた様々な人物を関連付け、かかわり合わせることで、江戸時代の全体像をつかもうとした。



まず、各自が描いた人物をカード化して持ち寄り、スクリーンで映写するなどして他の生徒に示した上で、どんな人物がいたか、姿から予想される人物の役割などを発表した。生徒は、友達が描いた絵を見てその出来に興味を示すとともに、どんな人物かという予想

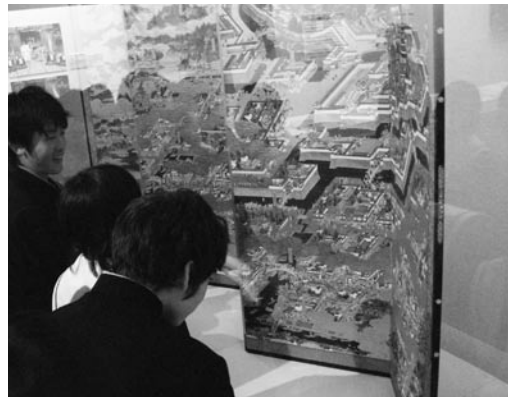
に関心を持って聞く姿があった。ひと通り生徒の注目する人物を眺めた後、特に関心を持った人物が、はたしてどんな風景の中にいるか再度視点移すために、今度は安城市歴史博物館において大型カラーコピーをした絵図を広げ、自分の注目する人物が描かれている場面にカードを置いた。並べたカードの近くには、自分が発表の際に注目していた友達の描いた絵があり、これにより、どこにどのような人物がいるのか、どのような人物が関連し合っているのかなど、江戸界隈にいる様々な人の役割やそれぞれの関連について明らかにできた。

また、その一方で、眺めることでかえってわからなくなったようなものもあった。例えば、実に様々なスタイルをしている「武士」の存在である。江戸幕府の支配構造や身分という視点から考えると、生徒は明確に分けられると思っていたのに、羽織袴をはいた風格のある武士から、草履のようなものをはき、一見裸足にも見える服装に刀を差していて辛うじて武士とわかる人物まで、どこからどこまでを範囲としたらいいのかはっきりと分けられない様々な「武士」の姿に、生徒は大変驚いたようだ。また、江戸城付近に多くの武士の分布があるが、特に袴をはいた武士に印象が集まり「中にズボンをはいたような武士がいる」と指摘する生徒がいた。しかし、日本橋界隈では武士らしき刀を差す者がいたが、江戸城付近の武士と違い、武士なのか町人なのか区別をするのが難しいようだった。生徒は、「刀を差しているから武士」と考える者

もいたが、「服装が浴衣みたいな感じだから、武士じゃない。」「武士でも裸足でいるのか。」「武士と庶民の見分けは付かなかった。」と推理を進めた。教師の助言として、御鞭打の場面で、傘に隠された将軍が美しい具足が整った足を見せている様子をして他の武士との比較をする視点にし、足元を見ても武士に違いがあり、様々な位や役割の人がいたことを伝えた。

町人についても同様な指摘を挙げさせた。生徒は、様々な職種の町人に気付き、なかには日本橋の袂でものをもらおうとする失業者などの姿も発見した。教師は、職種ごとにまとめ、どのような仕事や役割があったのかをわかるようにした。

ある生徒が、神楽を踊る人物に注目し、それをイラスト化した上で、どのようなことをした人物なのかを衣装などの様子から想像して発表した。すると、他の生徒からも、大きな獅子の頭を持っている「獅子舞」の存在や、曲芸のような見せ物などが挙がり、いわゆる芸能と呼ばれるような活動が江戸の町の中に多くあることに気付いていった。そこで、教師側から、屏風の登場人物の中にこのような踊りにかかわっている人々がどれくらいいるのかを探させた。その上で、店先で舞っている2人組の「万歳師」に注目させた。折しも、特別展の展示をしていたこともあり、具体的にどの姿なのかも拡大図を用いて明確に示すことができたので、「彼らがどこから来たのか」「いつの時期を描いたものか」を考えるため、再び本物の屏風の見学をすることにした。



ここで舞われていると考えられる三河万歳は安城発祥といわれ、家康が戦勝祈願で使ったことから、毎年正月に真っ先に江戸城に登城するほどの芸能である。また、こうした厚遇が地域の人々に高収入をもたらした②という博物館が示している史料での事実に触れ、絵図に描かれている人々が現在の安城市民で、江戸時代に身近な人々が毎正月江戸に向かったことに気付かせることができた。

生徒は非常に関心が高く、江戸がそこに住むだけでなく、首都として様々な地域の人々が入り出す都市であったことに気付かせることができ、交通手段がないと考えていた江戸との往来も積極的であったことにも触れることができた。

カ 第6時間目「江戸時代再発見」

ここでは、今までの学習をまとめるとともに、既習の知識や教科書などの記述で描いてきた江戸の姿を、今まで生徒によって出されてきたものをまとめ、自分自身で再度構築し直すという「自分と向き合う」活動と考えた。生徒はまとめの活動を通して、様々な身分ごとに屏風に示されている姿を把握し、江戸城や立ち並ぶ大名屋敷など位の高いものの屋敷の存在や、御鞭打などの大がかりな行事を行う様々な武士の存在、武士と町人の区別が付きにくい人物の存在など、実際には武士にも様々な役割が混在し、町人と武士が混在して江戸の街を形成していったことに気付いていった。また、

多様な職種がある町には、生活に必要なあらゆる商業が栄えており、武士とは違った活気のある姿が描かれていた。こうしたなかを安城から江戸まで足を運んでいた三河万歳のように、人に何かを見せて喜んでもらう人々の姿があったということも、考えなければならない。

さらには、既習の知識である江戸時代の様々な物資の輸送方法から、江戸が日本の中心的な役割を担うために様々な物資が集められていること、様々な店や商売が展開され、地方からも様々な物産や芸能などが入り込んで、町人を中心とする文化が育ったことを、生徒のまとめと意見から整理した。生徒は「史料」という事実にもとづいて自分の知識を整理し、江戸時代の身分制度や交通、武士の暮らし、町人の暮らしなどについて新しいイメージを持ち、様々な角度から分析した江戸時代を再確認することができた。

5. 成果と課題

本実践の成果と課題として、次のようなことが挙げられる。

成果 ～個人の史料読解力向上と意欲の継続・発展～

- ・実際に絵画史料を見て理解できることが多く、学んだことを絵画で実証することができた。
- ・三段階に分けた史料活用により、細部まで観察する力が付き、史料を読み取る力が付いた。
- ・既習の知識から自由に考えを出すことの楽しさを感じることができた。
- ・他の視点への関心の広がりを感じることができた。

課題 ～教師の力量・知識、討論の持ち方・授業設計～

- ・絵画史料から読み取るためにはある程度の知識を必要とし、その知識から分析をすることができなければいけない。絵画を用いることで、さらに深い視点での考え方が求められる。
- ・教師が生徒の発見する情報全ての知識を持つとともに、個の読解力を活用して全体で何を議論し学ばせるか明確にすることが必要である。

史料を用いることにより、生徒個々の調査方法の習得や、追究意欲の向上、細部にわたる読解力の向上に寄与することができるようになった。しかしその反面、一人一人の関心はまちまちで「他者と向き合う」時の視点が少なく、全体の場での意見が教師のコーディネートなしでは、十分つながらなかったという問題点が上がった。一人一人の史料をもとにした読解力は高まり、事実と向き合うことに史料は有効であったと考えるが、仲間と議論を重ねて解釈を修正していくという「他者と向き合う」という点までは行かず、仲間とともに同じことに関心を持ち、議論を生じやすい視点を準備することが大切だと感じた。絵画史料は生徒が関心を持って過去を探る一助となるが、深い個々の追究が進めば進むほど、全体の議論の課題には溝が生まれ、調べた事実を他と共有したり、持ち出せるようにはならなかった点が少し残念に感じている。

6. わたしの考える歴博活用案

| | | | | |
|------|----|-----|----------------|-------|
| 中学1年 | 社会 | 単元名 | 江戸時代の様々な身分とくらし | 2時間扱い |
|------|----|-----|----------------|-------|

① 学習のねらい及び指導要領との関連

教科書では江戸時代初期の江戸幕府の幕藩体制の成立とともに、江戸でのくらしや身分制度について触れている。明確に分けることで生徒の理解を図ろうとしているが、実際にははっきり分けることができるものでもなかった。こうした点に着目し、教科書で江戸のくらしや身分制度について知識として学び、しっかりと理解した上で、実際に史料に基づく調査を行うこととしている。通常の授業で学んだことの検証となり、一般的にも気軽に活用できる。史料を通して読み取ることにより、実際に学んだとおりの様子が描かれているところもあれば、明確に分類できないような部分もあることに気づく。歴史には常に事実の検証や史料批判が学習に大切であることを理解させるよい機会になるのではないかと考える。

② 使用史料 「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)

※布状にした屏風模型、パズル状にした屏風模型も活用する

③ 展開

| 過程 | 時間 | ○学習活動・●学習内容 | 指導上の留意点 | 資料 |
|----------------|----|--|---|-----------------------|
| 導入 展開 整理 | 20 | ○江戸時代の身分制度を知ろう ●江戸時代の身分制度について理解する。 | 教科書や資料を用いて、江戸時代の身分がどのように分かれていて、それぞれどのような特徴を持つか調べるようにする。 | 教科書・資料集 |
| | 30 | ○江戸図屏風から各身分ごとに人物を分けてみよう ●実際には明確に分類することが難しいことや江戸が様々な人によって構成されていることを知る。 | 当時の様子を示す絵画史料から、江戸時代の身分を実際に分類することで、分化の難しさを理解する。 | 江戸図屏風 (パズル状になったもの) |

| 過程 | 時間 | ○学習活動・●学習内容 | 指導上の留意点 | 資料 |
|----------------|----|---|---|------------------------------|
| 導入 展開 整理 | 20 | ○江戸時代の人々のくらしを知ろう ●江戸時代の様々な身分にスポットを当て、どのようなくらしをしているか史料を読み取るようにする。 | グループごとに分かれ、武士の多い町並みや町人の多い町並みなどに分かれて絵画史料を読み取り、当時のくらしを明らかにする。 | 江戸図屏風 (布状に拡大されたもの) |
| | 15 | ○町人で賑わう日本橋界隈ではどのようなくらしをしていたのだろうか。 | 人物を通して後ろの商店に目をやり、どのようなお店や労働者がいるのか明らかにしていく。 | 江戸図屏風 (パズル状にしたものを組み立てておく) |

| | | |
|----|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 15 | ○武士の多い江戸城周辺では、人々がどのようなくらしをしているのだろう。 | 大きな屋敷に住む武士に着目し、どのようなくらしをしているのか明らかにする。 |
|----|-------------------------------------|---------------------------------------|

①春成 秀爾、今村 峯雄『弥生時代の実年代—炭素 14 年代をめぐって』 學生社 2004

②「江戸っ子が見た三河万歳」『博物館ニュース』No.71 安城市歴史博物館 2009